

28歳で散った
絢爛たる詩魂



生誕120年

大正期を疾走した多面体
詩人 SARA Mineo
沙良峰夫展

築地小劇場と土方与志・梅子夫妻
一九一四（大正三）年に、前衛演劇のメッカ「築地小劇場」が、土方与志と小山内薫らにより開場する。第一回公演はドイツ表現主義の影響が色濃いゲーリングの『海戦』。独自の舞台装置クワベル・ホリゾン（ドーム型の穹



銀座―遊興の空間
一九二五（大正一四）年五月「銀座」が発刊。沙良峰夫は、安藤更生らと同人となる。創刊号に、沙良の長詩「銀座青年の歌」が載る。沙良は、本郷菊富士ホテルなどの高級下宿で生活しながら、緑のマントなどに身を包み、ステッキを手にして銀座を散歩し、「カフェー・ライオン」などの常連となる。煙草のヘビーな愛好者でもある。「カフェー・ライオン」の「鼻つまみ番附」には、土方与志・土方梅子夫妻、作曲家・山田耕作、近衛秀麿、菊池寛なども紹介。沙良は、関脇として登場。関東大震災後には行動範囲を広げ、東中野の吉行エイスケのバーなどにも顔をみせ、ダイスト辻潤、アナキストでもあった百瀬二郎（エリゼ二郎）、石川淳の小説「普賢」のモデルとなる山内恒身とも親交する。



雑誌「住宅」―編集長
一九一六（大正五）年に「住宅」が創刊。沙良は、そこに「北の抒情詩」など数編の詩を発表。沙良は一九二六（昭和元年）に、安藤更生の後任として編集長に就く。「書齋特集」などを組み、西條八十、室生犀星、吉田謙吉、村山知義などの書齋を紹介。関東大震災の東京をルポルタージュして「屋台店の調べ」を載せる。これは今和次郎や吉田謙吉らの「考現学」と類縁を結ぶ。沙良の死後、安藤更生が再び編集長になり、沙良の遺作「水死美人」などを「住宅」に掲載する。



曲する壁」が斬新。沙良は、土方与志夫妻と交友し、土方梅子を詩「白馬」で「白馬ガボカボカト ヒトリデ歩イテユク、大キナ白馬ガ・」と形象化した。吉田謙吉（舞台美術家）や村山知義（前衛芸術家）とも交り、一説によれば劇団員が欠員時には、舞台にもたった。

稲垣足穂「北極光」などのモデル
一九二七（昭和二）年、作曲家眞作秋吉は、娘の死を悼みながら、沙良の詩「海のまほろし」を歌曲「悲歌」として作曲する。後半心身に瘡を抱える。新境地を示す掌篇や文学夜話を「文藝時代」「文藝春秋」などに発表。またマルセル・シュウオップ、アーサー・マッケン、デクインシー、テオフィル・ゴティエなどに関心を抱く。沙良は、一九二八（昭和三）年に東京・古川橋病院で数度の手術の甲斐なく脾臓病で長逝。



稲垣足穂は、銀座での沙良を「偲ぶ会」に参加。彼をモデルにして小説「北極光」お化けに近づくと人を書く。二作は、足穂の「ピタ・マキニカリス」に収録。

＜関連事業＞

- ◆対談と記念演奏会
☆対談：「築地小劇場と吉田謙吉を巡って」
講師：塩澤珠江（吉田謙吉長女・著書『父・吉田謙吉と昭和モダン』など）
柴橋伴夫（本展・監修者 詩人・美術評論家）
日時：2021年10月10日（日） 15:00～16:00
- ☆記念演奏会：
歌曲「4つの連祷」初演―沙良峰夫の詩魂に捧げる
作詞：柴橋伴夫 作曲：八木幸三 アルト：斉藤みゆき
ピアノ伴奏：三輪菜
日時：2021年10月10日（日） 16:00～17:00
なお詩「4つの連祷」は、書家須田廣充による書として本展に特別展示されます。
- ◆記念講演会 パート1
「沙良峰夫とその時代」
日時：2021年10月16日（土） 14:00～16:00
講師：柴橋伴夫（本展・監修者 詩人・美術評論家）
- ◆記念講演会 パート2
「沙良峰夫と小樽の文学者の表現主義的シンクロシティ」
日時：2021年11月23日（火・祝日） 14:00～16:00
講師：亀井志乃（市立小樽文学館・館長）
- 事前申し込み方法
対談・記念演奏会・講演は、全て事前予約制です。（30人限定）
10月2日より（パート2は11月1日より）、お電話のみにて受け付けいたします。



市立小樽文学館
〒047-0031 小樽市色内1丁目9番5号
TEL.FAX. 0134-32-2388
otarubun@otarubungakusha.com
開館時間 午前9時30分より午後5時まで
（ただし入館は4時30分まで）
休館日 毎週月曜日、祝日の翌日（ただし土・日の場合は休まず振替となります）

アフロデットは海のおわ
泡よりいでて泡へかへる
（遺作）

2021年10月2日（土）～11月28日（日）

休館日＝毎週月曜・11月4日（木）・11月24日（水）
市立小樽文学館 監修 柴橋伴夫（詩人・美術評論家）
☆観覧料＝大人（大学生含む）300円 高校生・市内高齢者150円 中学生以下無料

詩人沙良峰夫

絢爛たる詩魂



和装姿の沙良峰夫（東京にて・大正11年）

沙良峰夫（さらみねお 一九〇一〜一九二八）、本名は梅澤孝一という。二八歳で早世した詩人。二〇二二年は、生誕二二〇年となる。これまで沙良峰夫は、「薄幸の詩人」「幻の詩人」といわれてきた。ある人たちは沙良を称して「青衿の人」「ダンディな唯美詩人」という。稲垣足穂は、そのいきさまをみつめて「北極光」と形象化した。白鳥の歌は、詩「アフロヂットは海のあわ 泡よりいでて泡にかへる」。アフロヂットとは、美の女神アフロディティのこと。

岩内の海霊から豊かな詩性を授けられた沙良の魂。そして大正デモクラシーや大正ロマンティシズムの飛沫を浴びつつ、西條八十や川路柳虹などの優れた詩人を師として仰ぎ、彼らが主宰する詩誌「白孔雀」や「現代詩歌」「棕櫚の葉」などに作品を発表。その詩は、高踏派や象徴派の作風をみせた。後半生では、アナキストやダイスト、さらには新感覚派の文学者とも交友して内視の眼を養い文学的な成熟をみせた。この展覧会ではその絢爛たる詩魂を辿りながら、大正期を疾走したその多面的な相貌にアプローチする。



父連（医師）と幼き頃の沙良峰夫



家族と共に中央に立つのが沙良峰夫

沙良峰夫 年譜

編・平善雄+柴権伴夫

- 1901（明治34）年 0歳
3月11日、岩内町大字橋町字清住五番地ノ巻に医師石川直の長男として生まれる。母は梅澤市太郎長女イシ。孝一と命名。妹はカツ、富士、春。祖父市太郎は初代岩内町長として知られ、家業は、鮭漁業、味噌醤油の醸造業などを営む。
- 1906（明治39）年 6歳
9月14日、父道過。
- 1912（大正元）年 12歳
5月27日、母イシ過。
- 1913（大正2）年 13歳
札幌中央創成尋常小学校（現・札幌育生館小学校）に転入学。北海道庁立札幌第一中学校（現・札幌南高等学校）に入学。
- 1915（大正4）年 15歳
文学書に親しみ、森鷗外、上田敏らに畏敬。
- 1916（大正5）年 16歳
札幌第一中学校を中退し、上京する。正則英語学校、アテネ・フランセ等に学ぶ。永井荷風訳「珊瑚集」、上田敏訳「海潮音」を受講する。
- 1917（大正6）年 17歳
川路柳虹に師事する。
- 1918（大正7）年 18歳
川路柳虹主宰の「現代詩歌」に「涙」「曇色の月」「秋のスケッチより」が掲載。
- 1919（大正8）年 19歳
「現代詩歌」に「幻想の女」などを発表。安藤更生、石川淳、島田謙二等と親交。西條八十に師事。一方、太平洋画会研究所（谷中）に学ぶ。萩原恭次郎、今東光、東郷青児、サトウ・ハチローらとの交流あり。同郷の親友池田雄次郎と浅草オペラに通う。
- 1920（大正9）年 20歳
「現代詩歌」に長編詩「アナトール」をよみて発表。
- 1921（大正10）年 21歳
女子美術学校生會持柄枝（1925年逝去）を知る。深刻な恋愛問題に悩む。
- 1922（大正11）年 22歳
西條八十編輯「白孔雀」同人に
- 1923（大正12）年 23歳
下宿先を本郷菊富士ホテルに。「黄表紙」同人、芳賀植、稲垣足穂、酒井真人らと交友する。「新女苑」「婦人公論」に作品を発表。九月関東大震災が関東一帯を襲う。雑誌取材のため旅行中。帰京するが外国人と見間違われ、憲兵に

不審尋問をうける。五〇音を数10回復誦した。吉田謙吉ほか、演劇人と交友する。

1924（大正13）年 24歳
「棕櫚の葉」に「通夜」「エラン・ヴィタール」「1923年9月中旬」を発表。「新小説」に「花」を発表。「文藝春秋」に「OLLA PODRIDA」を発表。築地小劇場開場する。沙良も出入りする。土方与志・梅子夫妻に愛される。

1925（大正14）年 25歳
「新小説」に「花」や「MEMORANDAM」を発表。「銀座」同人。「銀座」（創刊号）に「銀座青年の歌」「銀座隨筆」を発表。「銀座」の「カフェーライオン鼻つまみ番付」に沙良は関係に。

1926（昭和元）年 26歳
「新小説」に「煙草の灰」「住宅」に「屋台店の調べ」を発表。「住宅」編集長となる。「文藝時代」に「びゆるれすく」（芸術家トカ道化トカニ就イテノ安謐）を発表する。「住宅」に「北への抒情詩」を発表。

1927（昭和2）年 27歳
「クラク（苦楽）」に「海のまぼろし」発表。「海のまぼろし」に 冥作秋吉が作曲し、題名を「悲歌」とする。盛夏、病氣静養のため帰郷。

1928年（昭和3）年 28歳
再び上京する。3月27日発病。古川橋病院にて肺膿瘍症と診断。数回手術を受ける。5月12日、午後8時30分、古川橋病院で長逝。法名、「聞昭庵孝道一居士」。絶筆「水死美人」などが「住宅」に発表。「週間朝日」に、西條八十の追悼詩「遺稿を懐に」が載る。

1948（昭和23）年
稲垣足穂「キタ・マキニカリス」に沙良のモデル小説「北極光」「お化けに近づく人」の小編が収められる。

1966（昭和41）年6月22日
岩内町雷電に沙良峰夫詩碑が建立（揮毫・書家桑原翠邦）。

1967（昭和42）年6月22日
「華やかなる憂鬱 沙良峰夫詩集」（発行・沙良峰夫を偲ぶ会 限定200部）が刊行。

1977（昭和52）年
「岩内ペン」「沙良峰夫特集(1)」を組む。
1990（平成2）年
「岩内ペン」沙良峰夫特集(2)」を組む。
2021（令和3）年
沙良峰夫生誕120年を迎える。

多面体として

大正を疾走した詩魂の軌跡

海霊の地岩内

沙良峰夫は、一九〇一年（明治三四）年三月十一日に、岩内町大字橋町字清住五番地ノ巻（現・清住八一番地）に生まれた。医師たる父・石川直と母・梅澤イシとの間に一男三女が生まれた。その長男だった。母方の梅澤家は、代々鮭漁や醤油製造、呉服商などを営む商家で、二代目梅澤市太郎は、初代と七代目の町長になり、岩内の産業界や教育界の発展に多大な貢献をした。梅澤家の別荘「含翠園」（巖谷小波による命名）には、多くの文人達も訪れた。岩内の郷土館には、梅澤家に関するコーナーが設けられ、雷電の地には、沙良の詩碑「海のまぼろし」（揮毫・書家桑原翠邦）が建立されている。



「白孔雀」講演会記念写真（明治会館・大正11年10月14日）前列中央に西條八十、後列左より2人目沙良峰夫



梅澤家の別荘「含翠園」

《詩の森》―詩魂の醸成

沙良峰夫は、十代から永井荷風訳「珊瑚集」や上田敏訳「海潮音」を受講した。詩人を志向し札幌一中（現・札幌南高等学校）を中退し上京する。アテネ・フランセで仏語、正則英語学校で英語を、さらに太平洋画会研究所で絵を学ぶ。この画塾では、今東光や東郷青児と交友する。また詩人萩原恭次郎とも親交し、白山南天堂（カフェー）にも出入りする。川路柳虹の「現代詩歌」や「棕櫚の葉」や西條八十主宰の「白孔雀」に作品発表。「白孔雀」の創刊号には、安藤更生（文藝評論家・美学者）の沙良への献辞「玄黄秘雅」が載った。沙良は、「白孔雀」には、詩だけでなく、翻訳「オドレエルの影響」第二章を載せた。その後、雑誌「黄表紙」ともかわり、芳賀植、稲垣足穂、酒井真人らと交わる。沙良の死後、西條八十は沙良への追悼詩「遺稿を懐に」（詩集「美しき喪失」に収録）を発表する。



西條八十主宰・詩誌「白孔雀」創刊号



岩内雷電に建立された沙良峰夫詩碑「海のまぼろし」より



悲歌（作詞・沙良峰夫 曲・冥作秋吉）ソノシート



「悲歌」の楽譜